法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-04

宇佐美誠次郎教授記念号に寄せて

斎藤, 稔 / Saitō, M.

(出版者 / Publisher)
法政大学経済学部学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
経済志林 / The Hosei University Economic Review
(巻 / Volume)
52
(号 / Number)
3・4
(開始ページ / Start Page)
1
(終了ページ / End Page)
4
(発行年 / Year)
1985-03-15

宇佐美誠次郎教授記念号に寄せて

経済学部長
斎藤　稔

また一人、法政大学経済学部の看板ともいうべき先生が経済学部を去られることになった。宇佐美誠次郎先生は、一九四八年の御着任以来、法政大学において多年財政学の講義を担当され、財政学の方法論における独自の見解と戦時日本財政の研究など財政学者としても著名である。それだけではなく、宇佐美先生は、大原社会問題研究所の法政大学合併（一九四九年）以来の所員として、数度の所長および常務理事の重責を果されながら、『労働年鑑』の編集や『マルクス経済学レキシコン』の編集と校閲にあたられてきた。

また宇佐美先生は、戦後日本の論壇における代表的な論客の一人として、多数の著作、論文、翻訳のほかに『太平洋戦争史』、『日本資本主義講座』、『マルクス経済学講座』等の編者としても活躍され、幅広い研究領域で大きな業績を残されてきている。

宇佐美先生が財政学を専攻されたのは、学生時代に大内兵衛ゼミに参加され、戦後に大内先生監修のもとで日銀特別調査室の『満洲事変以後の財政金融史』を共同執筆されたことにはじまるとうかがっているが、宇佐美先生は大内ゼミ参加以前から中国経済に関心を持たれ、ゼミの卒論は「支那農業経済研究序説」であった。そのことが、

戦後におけるエドガー・スノーの『中国の赤い星』の翻訳につながる。この翻訳出版は当初一九四六年であったが、占領軍の圧迫により広く公刊されたのはサンフランシスコ講和後の一九五二年のことであり、私も学生時代に感激して読んだおぼえがある。

その後宇佐美先生は中国研究に深入りされることはなかったが、社会主義諸国の現状には大きな関心を持たれている。ソ連の日本研究者とも交友の歴史は古く、私などもモスクワに行くたびに、東洋学研究所のペヴズネル教授から「宇佐美先生はお元気ですか」と声をかけられたものである。また現在、宇佐美先生は日本・ドイツ民主共和国友好協会の会長であり、わが国では知られることの少ないドイツ民主共和国の事情の紹介と、両国の研究者の交流に大きな役割を果されている。法政大学経済学部で宇佐美先生が担当された最終年度の講義は「東ドイツ経済論」であった。

宇佐美先生のお仕事が一九七〇年代には『マルクス経済学レキシコン』中心であったとすれば、敗戦直後から一九五〇年代にかけては、宇佐美先生の論壇での活躍がもっともはなばなしかった時期であるといえよう。『法政大学百年史』の語るところによれば、「一九四五年八月から一九五二年一二月までの間に発行された政治、法律、経済、思想等、社会科学に関する雑誌および総合雑誌を対象とした（紀要、学会誌類を除く）」東大社会科学研究所戦後改革研究会の調査で、当時の法政大学経済学部スタッフ二一名の執筆論文総数は八二本で、平均約四本であったが、宇佐美先生の執筆論文は一七本で群を抜いてトップである。

この時期の宇佐美先生の著作としてもっとも名高いのが、井上晴丸氏との共著『国家独占資本主義論』（潮流社、一九五〇年）およびその改訂版『危機における日本資本主義の構造』（岩波書店、一九五一年）であった。この著作についての理論的評価は、古川哲教授が、宇佐美先生還暦記念論文集『現代資本主義と国家』のあとがきでのべ

られているが、社会主義研究者としての私の問題意識にひきつけていえば、この著作は、当時世界史的な新段階として理論的、実践的に提起された（事実上のスターリン批判としての）「人民民主主義革命」という規定を戦後日本の民主化の課題と結合する試みとして画期的なものであったといえよう。

この著作における実践的な問題意識について、宇佐美先生自身が『歴史評論』誌の座談会で次のようにのべられている。「……私の国家独占資本主義論について学生にいつもきかれることがありまして、なぜ『危機における日本資本主義の構造』は半封建制をあれほど強調するのか。戦後についても強調しているのはなぜか、先生のいまの考えはどうなんだということをきかれるのです。あれは戦争直後の話だということがあるのですが、もう一つぜひ言っておきたいのは、あれを書いていたのは農地改革の真最中なわけですね。第一次農地改革が終わって、ちょうど農地改革をめぐって論争がたたかわれていたときなんです。ソ連の案が出たり、日本の革新政党の案が出たりして、政府の農地改革はあそこでおさえようとするわけです。それに対する意見を当時書いたのですけれども、真最中に書くときに、それはもう近代化されているということは到底書けないわけで、半封建制をもっと脱却するような方向に持っていくためには政府の出している案は封建的な性格が強いのだということを強調するのが当然なわけで、あとから見て少し強調しすぎていると言われても、私は批判されるつもりはないと学生には言っているわけです。学問というのはそういうものじゃないかというふうに学生に言っているものですから……」

しかもまた、この著作の前後には、法政大学経済学部教授会をゆるがした「三教授事件」があった。上杉捨彦教授を含む本学部三教授のレッドパージ反対声明が教授会において処分問題にまで発展した時、宇佐美先生は、久留間鮫造先生、渡辺佐平先生とともに事態収拾に努力されたが、それはただちに実を結ぶにはいたらなかった。この過程は今日なお、教授会民主主義の確立についての重要な教訓となっている。

宇佐美先生は、近年は健康を害されたこともあって教授会での御発言もひかえめであったが、授業の負担から解放され元気をとりもどされたあかつきには、研究の集大成と後進の指導にいっそうの御活躍を期待したいものである。

一九八四年一〇月